

宗教と排除・差別

『現代宗教 2018』編集委員会

東西冷戦の終結と相前後して新自由主義が台頭、今や世界を席捲している。「自由」の名のもとに、富める者はますます富み、貧しき者は経済的に奪われるのみならず、その尊厳をも傷つけられる状況が、あちらこちらで出来している。力を持たない者や少数者は、社会的格差の一方に追いやられ、もう一方にいる者たちは、この構図を固定化すべく、弱い者たちを巧みに分断し、憎悪を煽り、偏見を植え付け、高みの見物を決め込んでいる。

宗教は特定の階層・性別・職種や病んだ人々などを呪われた者とみなし、こうした分断・憎悪・偏見を助長することもあった。しかし同時に宗教は、呪われた者にこそ救いの手を差し伸べ、時に貴賤の価値観をも転換させ、信仰と希望と愛を説いてもきた。何も悪い宗教と良い宗教があるのではない。宗教は弱い者たちを排除し、差別する格好の舞台装置となるとともに、排除・差別の壁を打ち砕く大いなる力をも有しているのだ。

私たち『現代宗教』編集委員会は、一昨年「対立と融和」という特集を組んだ。この路線を継承するならば、今回の特集は「排除・差別と受容・和解」となったのかもしれない。しかしこの2年間で社会のさまざまな場面で分断は深まり、衝突は激しさを増している。私たちの身の回り、特にインターネットには、ヘイトの言説や弱者へのあからさまな差別があふれ、自国中心主義的心情・思想が、むき出しの排外主義運動や

素朴な霊性文化（スピリチュアリティ）と結びつきつつある。少数派が苦しむ姿を見て、自分たちこそが「普通」「あたりまえ」だと安堵する心性は、「人それぞれ」の価値相対主義と冷笑主義を得て、病んだ日本教ともいえよう。こうした認識から、私たちは「宗教と排除・差別」にこそ焦点を当てるべきだという判断に達した。

世界的に見ても、信仰やそれに基づく文化的相違に起因する暴力の連鎖、米国のトランプ政権による特定国民の入国制限やエルサレムのイスラエル首都認定、欧州における極右政党の存在感など、容易に受け入れがたいニュースが連日のように駆け巡っている。本特集では、臼杵陽と三浦まりとの対談「宗教と差別」で、女性差別、イスラム・フェミニスト、ISなどを議論の俎上にあげつつ、宗教が排除・差別を産み出し、棹さすのか、あるいはその風潮に抗うのかという根源的な議論を展開している。また佐原徹哉「サラフィ・ジハード主義の歴史と「イスラム国」」は、一般に「過激思想」と喧伝されるサラフィ・ジハード主義を、19世紀後半から連綿と続く「イスラム復興」の流れに根ざした、反近代、反西欧文明の思想運動としてとらえようとする。そして平井康大「理念の共和国はどこへ」は、宗教右派の退潮の要因を、経済的リバタリアニズムの蔓延に求め、社会規範が薄れ、新たな格差が進行する中での宗教勢力の模索を追う。さらに倉金佳「我々は移民の国にはなりたくない」は、2015年の欧州難民・移民危機以降のハンガリーの移民政策を取り上げ、同国のキリスト教の伝統や国外の同胞への配慮とからめて論じる。

宗教が差別・排除とからんだり、そこからの解放の後ろ盾となったりするのは、先にも触れたように海外のことだけではない。本特集でも、友常勉「サバルタンと宗教」は、仏教教団と被差別部落との救済と排除のアンビヴァレントな関係を、遠田良善という宗教者であり芸能者が追求した救済の在り方に見ようとする。また萩原修子「水俣病事件と「もうひとつのこの世」」は、水俣病をめぐる差別と排除の中で、被害者らの運動が、宗教に救いを求めないものの、それが宗教的装いを持っていたことを明らかにする。そして藤生明「日本会議と葦津珍彦」は、憲法

改正をにらむ日本会議の理論的・精神的支柱に葦津珍彦を見出し、彼の幅広い交友関係に日本会議の伸長を重ねつつ、一抹の危惧を吐露する。

私たちは今、排除・差別の緊張の高まりの中に生きている。もしかすると解決の糸口の一つに宗教があるのかもしれない。あるいは排除され、差別されてきた者の救いは必然的に宗教的な装いをとるとも考えられよう。しかしそのような希望的観測の前に、いやそれをも視野に入れつつ、「泣く子を起こすな」「のど元すぎれば」とやり過ぎされがちな「宗教と排除・差別」の問題に、ここで今一度じっくり取り組んでみたい。

(文責：弓山達也)